

令和8年3月14日（土）

お早う御座居ます。まず、素読の解説から始めましょう。

子曰く、人の己を知らざることを患えず。人を知らざることを患う。

（学而第一【16】）

今勉強している皆さんにお聞きしたいのですが、学問とは何の為にするものなのでしょうか。

論語の中で孔子は、学問とは自分自身を磨くために行うものだと説いています。自分が学びたいと思うから学ぶのであって、他人から評価される為ではありません。

「人の己を知らざることを患えず」

学問とは、本来自分自身を磨き高める為に行うものです。他人から評価されたり、知られたりする為に学ぶものではありません。他人が自分の事を知らなくても、それを気にする必要はないという孔子の教えです。

「人を知らざることを憂う」

自分が知られていない、認められていない事を嘆くのではなく、自分が他人をよく理解していないことを心配しなさいという意味です。

人を率いる立場にある人ほど、自分の評価よりも、人を見抜く力が大切です。

本日は比田井さんのご紹介で廣嶋さんもお越しですので、少し幕末から明治維新にかけての話をしたいと思います。

幕末の志士たちは、人材を求めて全国を歩き回りました。時には馬を使うこともありましたが、基本的には自ら足を運び、優れた人物や、面白い人物がいるらしいと聞けば、実際に行って話をしています。

そうして多くの人と接する中で、この人は本当に素晴らしい、評判ほどではない、等と自分の目で人物を見極めていったのです。

中斎塾フォーラムでは陽明学を学んでいますので、陽明学に関して一人紹介します。

幕末に中岡慎太郎という人物がいました。坂本龍馬と親しく、最期も龍馬と共に暗殺されたことで知られています。その中岡慎太郎が西郷隆盛と会った時、大変感銘を受けました。板垣退助に宛てた手紙の中で、西郷隆盛を次のように評しています。

「西郷隆盛は実に素晴らしい人物であり、まるで安倍貞任のような英雄豪傑である」

中岡は西郷隆盛について、肝が据わっている上に学識も豊かであると評価し、単なる豪傑ではなく、知行合一を体現した英雄豪傑であると書き残しています。

幕末から明治維新の資料を見ても、西郷隆盛を「知行合一の英雄」と断言している点は非常に印象的で、私が見た限りでは中岡慎太郎以外には見当たりません。

様々な学者の著作を見ていると、「知行合一（ちこうごういつ）」とルビが振られていることがあります。中には「ちぎょうごういつ」とルビを付けている小説家や学者もいて、正しい読み方を確認してから記してほしいものだと思っています。

西郷隆盛は藤田東湖に会った際、大変な衝撃を受けたと言われています。世の中にこんな人物がいるのかと驚き、姿を見た瞬間、圧倒されるような威厳や存在感を感じたそうです。

もう一人の例が、橋本左内です。西郷隆盛は初めて橋本左内に会った時、華奢で小柄な見た目から、それほど高く評価していなかったようです。若い頃の西郷隆盛には、第一印象で相手を判断する一面があったことがうかがえます。

しかし、西郷隆盛の興味深いところは、自分の判断が誤っていたと気づけば素直に認めることです。橋本左内と話を重ねるうち、その優秀さを理解し、失礼を詫びるほど高く評価するようになりました。

西郷隆盛は優れた人物だと思えば率直に称賛し、評価できない場合でも陰で悪く言うのではなく、本人に直接伝えるタイプでした。こうした率直で誠実なところが、彼の魅力の一つだと思います。

幕末から明治維新にかけての時代、優れた人物に出会うとお互いに認め合い、深く尊敬し合うことがよくあったようで、その代表的な例が、西郷隆盛と勝海舟です。二人は初対面で互いの人物を認め合い、高く評価したと伝えられています。

勝海舟は著書の氷川清話の中で、自分が恐ろしいと思うほど優れた人物が二人いるとして、横井小楠と西郷隆盛の名を挙げています。優れた人物への敬意を周囲に語り、後世にも書き残しているのです。互いに認め合い、その感動を率直に伝え合う姿は、この時代ならではの魅力です。

そう考えると、幕末の志士達はよく意思疎通が出来たものだと思います。薩摩と東北など遠く離れた地域の人同士では、会話だけでは通じにくかった為、意思疎通には筆談がよく用いられました。書けば同じ日本語として意味が伝わるからです。

意気投合すると酒を酌み交わし、ともに詩を吟じ合ったといわれています。古人の詩を詠むこともあれば、即興で詩を作って応じることもありました。言葉だけでなく、詩を通じて心を通わせていたところに、この時代ならではの面白さが感じられます。

「人の己を知らざることを患えず。人を知らざることを患う」

この言葉について、洪澤栄一は「金は地中にあっても金なり」と、人物を金に例えて独自の解釈を示しています。金は地中に埋もれていても金であるように、優れた人物はたとえ世に知られていなくても、その価値を失うことはないという趣旨のことを語っています。

① ^し子曰く、^{いわ}学は^{がく}及ば^{およ}ざるが^{ごと}如くするも、^{なお}猶^{これ}之を^{うしな}失^{おそ}わんことを恐る。

(泰伯第八【17】)

これについては、三島中洲先生の解説がとても興味深いです。三島中洲先生は、この言葉をマラソンに例えて説明しています。

師匠が自分の前を走っているとします。弟子はその背中を必死になって追いかけてますが、どれだけ一生懸命走ってもなかなか追い付くことができません。

自分の努力が少しでも鈍ると、師匠との距離は増々開いてしまいます。やがて師匠の姿が見えなくなり、どこを走っているのか分からなくなります。

そして、自分が進んでいる道が本当に正しいのかどうかさえ分からなくなってしまう。

三島中洲先生は、そのような状態になることを恐れなさい。そうならない為には、日頃から絶えず努力を重ねることが大切だと言います。師匠の歩みに少しでも近づけるように、努力を重ねなさい。地道な積み重ねによって、師匠についていける力を養いなさい、ということです。

三島中洲先生について語る上で、湯島聖堂にゆかりの深い人物として、佐藤一斎先生を挙げることができます。佐藤一斎は江戸時代末期、湯島聖堂で総長として教えていた儒学者でした。一斎には士子(ことこ)という孫娘がいました。

士子は、のちに日本の首相となる吉田茂を、養母として自分の子供のように育てたことで知られています。現在若い世代の中には吉田茂の名前を知らない人も少なくありませんが、戦後日本の復興と国づくりに大きな役割を果たした人物です。

吉田茂を育てた士子は、幼い頃から佐藤一斎の厳しい薫陶を受けていました。一斎が身につけていた朱子学や儒学、そして陽明学の教養や精神は、士子に深く受け継がれました。士子は、その学びや価値観を吉田茂にも伝えていったのです。

その後、吉田茂の孫にあたる麻生太郎がどの程度その影響を受けたのかは分かりません。多少の薫陶は受けたでしょうが、政治家としての個性や振る舞いには大きな違いが感じられます。

人間の考え方や価値観には、血筋のようなものがあるように思います。たっぷり注がれた教養も、代を重ねるうちに少しずつ薄れていくのですが、それでも何らかの形で残っていくのではないかと思います。

三島中洲の話に戻ると、その師にあたる佐藤一斎に、「龍虎」と呼ばれた二人の弟子がいました。龍が山田方谷、虎が佐久間象山です。この二人はともに弁が立つことで知られていました。山田方谷はそれほど大柄ではありませんでしたが、佐久間象山は容貌魁偉でした。

黒船が日本に来航した頃には、佐久間象山や山田方谷をはじめ、多くの人々が強い関心を寄せていました。佐久間象山は、武士として威風堂々の身なりや立ち居振る舞いでしたので、黒船から上陸した外国人が象山の前を通

った際、思わず姿勢を正し一礼して通り過ぎた逸話も残っています。それだけ象山には、人に威厳や風格を感じさせる雰囲気があったのでしょう。

山田方谷の弟子には、三島中洲や河井継之助がいました。一方、佐久間象山の弟子には、吉田松陰や小林虎三郎がいました。

黒船を見に行った際、三島中洲と吉田松陰が顔を合わせ、互いに頭を下げ合った話も伝わっています。

系譜でいえば、三島中洲の師は山田方谷、吉田松陰の師は佐久間象山です。

- 佐藤一斎 → 山田方谷 → 三島中洲
- 佐藤一斎 → 佐久間象山 → 吉田松陰

図にすれば一目で分かりやすいですね。

今、三島中洲先生についてお話していますが、彼は明治10年10月10日に、漢文を教える学校を設立しました。この学校は現在も二松学舎大学として受け継がれています。三島中洲のお話をしようと思いながら、血筋等様々なことに話が及びました。

三島中洲は大正天皇に漢詩を教えた人物として知られています。歴代の天皇陛下として多くの方がおられますが、漢詩によってその名が知られているのは大正天皇お一人といってよいでしょう。

大正天皇は、一般的にあまり良くないイメージが残っているように思われますが、漢詩の観点から見ると、その評価は見直されるべきではないかと思います。

三島中洲と大正天皇との関係は、高齢の三島中洲が、孫ほど年の離れた若き皇太子を教える構図でした。

皇太子時代の大正天皇が山登りをされた際のことです。お供の者が大勢いる中で、三島中洲も同行していました。その頃の三島中洲は高齢で、山道を登るのもやっとの様子でした。よろよろと歩く三島中洲をご覧になった皇太子は、「先生、押して差し上げましょう」と声をかけ、その腰を押しながら山を登られたといいます。

これに対して三島中洲は大変恐縮し、「皇太子殿下にお支え戴くなど、誠に勿体ないことでございます」と申し上げたそうです。この逸話からは、年老いた師と若き皇太子との温かな師弟関係の一端を伺うことができます。

大正天皇と三島中洲の系譜を辿っていくと、さらにその先に、佐藤一斎の門下とのつながりが見えてきます。佐藤一斎には、番外の弟子ともいえるべき人物がおりました。それが西郷隆盛です。

西郷隆盛は佐藤一斎から直接教えを受けたわけではありません。しかし、佐藤一斎の著した『言志四録』を深く読み込み、その中から自分の血肉としたいと思う言葉を書き写し、自らの修養の糧としていきました。

大正天皇と三島中洲の関係になぞらえるなら、西郷隆盛と明治天皇の間にも、実に興味深い交流があったように思います。

西郷隆盛が深く敬愛していた人物に、薩摩藩主の島津斉彬がいます。斉彬とはどのような人物だったのかと尋ねられた際、西郷は「お天道様のようなお方でした」と答えたといわれています。斉彬は西郷の才能を高く評価し、この人物を育てられるのは自分しかいないと語るほど期待を寄せていました。

しかし、斉彬は志半ばで急逝します。その後、藩政を担った島津久光は西郷を快く思わず、両者の関係は対立的なものとなりました。久光は西郷を厳しく非難し、ついには沖永良部島への流罪に繋がります。

この苦難こそが西郷を大きく成長させたと言えます。極限の境遇に置かれながらも、それを乗り越えることで西郷は人格を磨き、後世に名を残す人物となりました。そう考えると、西郷を支え育てた斉彬だけでなく、厳しい試練を与えた久光もまた、結果としては西郷の成長に大きな役割を果たしたと私は思います。

佐藤一斎は、人間が人間らしく成長していく道筋について、人物を三段階に分けて考えました。

第一等の人物は、天地自然を師とすることができた人です。

第二等の人物は、優れた師に出会い、その人から直接教えや薫陶を受けた人です。素晴らしい人間との出会いを通じて鍛えられ、成長していきます。

第三等の人物は、優れた書物に出会い、その中から知恵や教えを学び取った人です。

西郷隆盛は沖永良部島への流罪の際、多くの書物を持ち込み、さらに島の人々から本を借りて熱心に読み続けたといわれています。その中でも佐藤一斎の『言志四録』に深く感銘を受け、自ら『手抄言志録』を書き残しました。そうした意味で、西郷はまず優れた書物によって学ぶ、第三等の人物になる

資格を得ました。

西郷は、島津斉彬という優れた師に出会っています。この出会いによって、第二等の人物へと成長したのでしょう。

そして、命の危険さえ感じるような厳しい境遇の中で天地自然と向き合い、それを師とする境地に達したことで、第一等の人物と呼ばれるようになったのだと思います。そう考えると、結果として西郷をその境地へ導いた島津久光にも、少なからぬ役割があったと考えています。

こうした人と人の関わりの中で人物は磨かれていきます。先程お話した勝海舟と西郷隆盛のように、わずかな対話の中で互いに深く認め合い、惹かれ合うこともまた、人間形成の大きな力になると考えて下さい。

山田済斎による『西郷南洲遺訓』があります。山田済斎は、先ほどお話したように二松学舎大学の学長を務めた人物です。また、『南洲百話』のような著作も残しており、大変興味深い内容です。

佐藤一斎が育てた門下の第一等人物として、西郷隆盛はまさにそうなるべくしてなったのだと思います。西郷隆盛自身は書物を残しませんでした、代わりに庄内藩士が『南洲翁遺訓』を後世に残しました。

『南洲翁遺訓』が生まれた背景には、西郷と肝胆相照らす関係にあった人々の存在があったのだと思います。『南洲翁遺訓』には、有名な「美田を買わず」という漢詩も出てきます。

今日は「学而第一の人物」というテーマに関連して、人物と学問についてのお話をします。手元にあった『南洲翁遺訓』に関する資料の中で、安岡正篤先生が残された特に興味深いものがありますので、ご紹介しておきたいと思います。

「庄内の人々が、世間的には俗名で葬り去られたも同然の西郷先生を、これ程までに慕い続けた理由は何か。戊辰戦争の降伏以来、庄内藩が西郷先生から受けた寛大な処置への恩義も、たしかにその一つであろう。しかし、理由はそれだけではない。」

ここからが面白いところで、もっと深い根源があったのです。当時庄内藩を代表する菅実秀は、かつて次のように語っています。「世間の人々は皆、西郷先生の業績を賛美している。あれだけのことを成し遂げたから素晴らしい、これだけのことをやったから偉いと。しかし自分は、先生の気韻の高さ、そして中国古の聖王である堯舜（ぎょうしゅん）を目標として国を建て、身

を尽くして実行されたその精神（建人力行）を慕っているのだ。もしそうでなければ、特別に尊敬するには及ばない」

つまり、西郷隆盛が明治維新の立役者だから素晴らしいと慕っているのではないのです。西郷隆盛という人物の考え方、その人間性そのものが素晴らしいからであり、それに基づいた必死の努力を実行されたからこそ、仰ぎ見ているのです。もし西郷先生にそれほどの気韻がなければ、人々も私も、これほど尊敬することはなかっただろうと言っているわけです。

それでは、「今の時代に置き換えて考えてみる」というテーマでお話します。今日初めて参加された方もおられますので、まず下に挙げたテーマについて説明し、その上で今の時代に当てはめて考えてみたいと思います。

以前、昭和 21 年 2 月 17 日について調べてみましょうとお話しました。実際に調べて下さった方も少しずつ出てきています。谷口さんをはじめ、そのような動きが広がっていることは大変良いことです。昭和 21 年 2 月 17 日、この日に出されたのが「金融緊急措置令」です。銀行に預けていたお金を引き出せなくなりました。いわゆる「預金封鎖」が行われた日です。その日を境に、人々は自分のお金であっても自由に引き出すことができなくなりました。

政府は財源が不足していた為、これから国民の財産に税金をかけると発表しました。これが財産税です。財産が少ない人でも税金を負担しなければならず、財産の多い人には最大で 90% の税金が課されることになりました。

また、財産税を徴収する為、全ての財産を報告するよう求めました。しかし、正しく報告しない人もいるだろうということで、3 月 3 日には「臨時財産調査令」が出され、国が財産を調査することになりました。

食料政策についても、都市部への供給を優先する方針が取られました。その為、地方の人が都会へ移り住むことを制限する措置が実施されました。東京、大阪、名古屋などの大都市への転入を制限する「都会地転入抑制措置令」が出されたのです。

これらの内容については、レジュメ下の「昭和 21 年 2 月 17 日を調べよう」の欄に、日本産業経済新聞、朝日新聞、毎日新聞などが昭和 21 年 2 月 17 日付の一面で掲載した見出しを並べてあります。

インターネット上には正しい情報と誤った情報が混在していますので、ご自身で判断しながら、事実かどうかを考えつつ調べて戴くのが良いと思います。もしインターネットの情報に納得できなければ、国立国会図書館へ行けば当時の新聞を閲覧できます。

この論語の内容を現代に置き換えて考えてみたいと思います。例として、北方領土返還要求全国大会での経験や、高市早苗さんの警備状況についてお話しします。

私は以前、JC（青年会議所）に所属していました。JCでは「北方領土返還要求全国大会」に参加しており、私が活動していた当時、その大会の小委員会委員長を務めました。

この全国大会には、内閣総理大臣が必ず出席します。私が小委員会委員長を務めた際には、民間側の警備責任者を担当することになりました。その為、公安関係者とともに、総理大臣の警備体制について打ち合わせを重ね、実際の警備運営に携わりました。それ以来、40年以上にわたり、歴代総理大臣の警備の様子を見続けてきました。

歴代の総理大臣については、基本的に警察が独自に計画し実施する警備体制に任せる形でした。ところが、途中で変化がありました。細川護熙さんが総理大臣に就任された時、警備体制が厳格になりました。その後は徐々に警備が緩和され、手抜き状態になったのは、安倍晋三総理の時代でした。

今回、高市早苗総理を警備している時の状況を見てみると、安倍晋三さんの時を上回るほど、警備が大きく緩んでいると感じました。

総理大臣が壇上に立つ際には、周囲にSPが配置されます。壇上の周り、出入口付近、そして総理大臣の後方にも警護員が配置されます。ところが、私が見た限りでは、高市総理の挨拶中、SPの緊張感が感じられませんでした。これでは万一のことが起きかねないと思いました。

高市さんの挨拶が終わると、次に外務大臣が立ち上がりました。外務大臣が椅子から立ち、壇上へ進んだ瞬間、外務大臣担当のSPがずっと後ろに立ちました。外務大臣が立った時には、それまで見えなかったSPが出てきて、左右に立って警護をしていました。

その警備の様子を見ると、総理大臣よりも外務大臣の方を重視しているのではないかと感じるほどでした。これは非常に問題だと思います。

なぜこのような状況になったのかといえば、官邸側から明確な指示が出ていないからではないかと思います。官邸から適切な指示が出れば、警察側もそれに応じた警護体制を取ります。

ここで論語の話につながります。

「人の己を知らざることを憂えず、人を知らざることを憂う」

自分が理解されないことを嘆くのではなく、自分が人を理解していないことを問題にしましょう。高市さんの場合、この「人を知らざることを憂う」という点を考えなければならないと思います。

政治においては、適材適所が大切です。自分を守ってくれる人、必要なことを進言してくれる人を周囲に置かなければなりません。

「警備のこともよろしくお願いします」と一言伝えるだけでも、警察側は警察としてしっかりとした SP 体制を整え、必要な対応を取る筈です。高市さん自身がそこまで意識を向けていないように見えます。本人が全てに気を配れないのであれば、周囲に判断力のある人を置く必要があります。だからこそ、「人を知らざることを憂う」

自分を慕ってくれる人、自分を応援してくれる人、自分の為に祈ってくれるような人たちとの関係を大切にしている一方で、本当に必要な能力を持つ人を周囲に置くことができているのか、という点が気になります。これは論語から出てくる考え方です。

以上、論語の説明と、現代の出来事に置き換えた話を一つさせて戴きました。

昭和 21 年 2 月 17 日について調べてみましょうという話をしました。その中で大切なのは、世の中に出ている情報の中に、どれくらい真実ではないものが含まれているのかを見極めることです。

その為には、自分自身の判断力が必要です。人から話を聞いた時、或いは何かを見たり読んだ時、真実か偽の情報か判断できる力を持たなければなりません。

今日産経新聞の見出しが興味深かったので、購入しました。中国側から発信されている情報として、高市首相は軍国主義者である、琉球独立は既定路線として進んでいる、という偽情報が出ている事実が掲載されていました。

偽情報の発信は中国では珍しいことではなく、軍事活動の一環として重要視されています。内部でも偽情報の発信や情報工作を十分に行っていないと

見なされれば、首になる可能性があります。

習近平氏の政権下では、汚職摘発を理由に多くの幹部が処分されています。それは単純に汚職だけを理由にしたものではなく、自分の方針に従わない人物や、自分にとって脅威となる人物を排除している面もあると思います。

日本はしばしば「スパイ天国」と呼ばれ、スパイ活動を行う側にとって活動しやすい国だと指摘されることがあります。この点についても少しお話ししたいと思います。

私がかつてソ連を訪れた際のことです。JC（青年会議所）のメンバーとして、北方領土問題について申し入れを行うために訪問する前、警察庁から呼び出しがあり、公安担当者から説明を受けました。

その内容は、現地では魅力的な女性が近づいてくることがあるが、安易について行っはいけないというものでした。さらに、様々な形で接触を図ってくる人がいる為、十分に注意するよう警告されたのです。

公安によれば、ソ連側は外国から訪れた政治家や将来影響力を持つ可能性のある人物に接触を図ることがありました。一方で公安は、そうした人々が帰国した後も、言動に変化がないかを一定期間観察しているとの事です。

例えば、それまでソ連に批判的だった人物が帰国後に急に好意的な発言をするようになった場合、その背景に何があったのかを注意深く見ていたというのです。

当時は「食わせ、飲ませ、抱かせ」という言葉もあり、接待や利益供与によって相手を取り込む工作活動の例として語られています。

このような理由から、共産社会主義では情報機関が接触した人物を、自国に有利な協力者として日本へ送り返すことを当たり前に行う、と公安は考えていました。特に共産圏の国を訪問した人については、帰国後も長期間にわたって言動の変化を観察し、問題がなければ監視対象から外します。不自然な変化や外国との継続的な関係が疑われる場合には、その後も継続して調査を行うようです。

一方、日本は外国人に対して同様の活動を行ってこなかった為、日本はスパイ活動がしやすい国だと海外から見られています。

こうした状況を改善する為、高市総理は情報収集・分析体制の強化や、外国による不正な情報活動への対策を進める必要があると考えたのでしょう。その一環として、国家情報会議や国家情報局の設置が閣議決定されたという

のが、この話の趣旨です。

外国による情報活動に対して日本もより厳格に対応できる体制を整えようとしている、ということです。

アメリカについても触れておきたいと思います。私は以前から、アメリカはならず者国家になったと申し上げてきました。しかし最近、それに加えて、行き当たりばったりという言葉も付け加えることにしました。

以前は「トランプさん」と呼んでいましたが、今は「トランプ大統領」と呼んでいます。なぜなら、トランプ大統領自身がならず者のような振る舞いをしていることを明確にしたと思うからです。そのような人物を大統領の座から追い出さずにいる以上、アメリカそのものもならず者国家になったと言わざるを得ません。

今回のイランをめぐる原油問題についてもそうです。ホルムズ海峡が封鎖されれば原油が入ってこなくなります。そこで今度は、ホルムズ海峡を通らずに輸送できるロシア産原油については制裁を行わないという方針を示しました。ただし、当面の間だけ、とも言っています。

こうした対応を見ると、結局は行き当たりばったりに見えてしまいます。確たる戦略や戦術もなく、結果、場当たりの対応になっています。ならず者国家というものは、このように行き当たりばったりの対応をするものなのだと感じております。

ここで少々余談を申し上げます。本日は「令和8年を考える」というテーマですが、今ちょうど頭に浮かんだことがありますので、お話しさせていただきます。

『論語』の中に、国家が外国に文書を出す際には四つの段階を経なければならないという考え方があります。それは「草創」「討論」「修飾」「潤色」の四段階です。

今、私は西郷隆盛について書いておりますので、それを例に説明します。

第一の「草創」は、アイディアの段階です。どのような西郷隆盛像を書きたいのか、どういう考え方で描くのか。その思いつきや着想が草創です。

第二の「討論」は、そのテーマに関心のある人達が集まり、どのように書いたら良いかと議論を重ねる段階です。

第三の「修飾」は、専門家の意見を取り入れることです。専門家から助言を受け、それを反映させていきます。

第四は「潤色」です。論語では、外国へ出す外交文書は、それにふさわしい格調のある文章に仕上げなければならないとされています。

例えば、「馬鹿野郎」と思ったとしても、そのまま書くのではなく、「好ましからざる印象を与える」といった表現に置き換える。直接的な言葉ではなく、柔らかく遠回しな表現で、格調高く伝えなさいということです。

『論語』にはそのような考え方が記されています。西郷隆盛について執筆していることもあり、その話が頭に浮かびましたので、ご紹介いたしました。

〈恒例の質問〉

- 今年良い日が続いておられる方
- 嘘はつかれなかったし、嘘もついていないという方
- 有難うと言いつけているし、有難うと言われ続けている方
- 身体の手入れをよくやっていると思う方
- 自分磨きをよくやっていると思う方
- 昨晚寝るとき、満足感を持って寝た方

以上で本日は終了致します。有難う御座居ました。